

# まちの史跡めぐり

166

町文化財専門委員 石龍 豊美夫

## 江戸時代の表彰制度(1)

宗像郡武丸村の孝行者正助(一六七一〜一七五七)についてはご存じの人も多いと思います。インターネット上のフリー百科事典「ウィキペディア」にも「武丸正助」の項があり、「主な親孝行の逸話」を次のようにまとめています。

●曇りの日、雨が降ると思った父親からは下駄を履くよう、また雨は降らないと考えた母親からは、草履を履くように言われた正助は、二人の言い分けを守るため、片足に下駄、もう片足に草履を履いた。

●牛や馬にも愛情を注ぎ、家畜をいたわっていた。荷物を運んだ帰りは「馬が大変だろう」と馬に乗らず、更に鞍を自ら背負ったこともある。

●年老いて歯が弱くなった両親の前では、硬いものを食べなかつた。歯の丈夫な自分をつらやましく思うことを気にかけていたため。

●父親が酒好きであったが、苦労している正助に、とある酒屋が酒をただで渡すも、彼はその日からその酒屋に行かなくなつた。「あくまで自分の働いた金で買って飲ませたい」という理由による。

●愚直とも言えるほどにまつすぐに生きた人物ということになる。父と住み始めて一〇年、寝たきりになって三年が過ぎたある日、父が突然こう言つて、手を合させた。自分がこんなに大事にされるのは、氏神があわれに思い、なんじにのりうつたにちがいない。ありがたうことだ。父は貞享三(一六八六)年の春に亡くなつた。

●父親が酒好きであったが、苦労している正助に、とある酒屋が酒をただで渡すも、彼はその日からその酒屋に行かなくなつた。「あくまで自分の働いた金で買って飲ませたい」という理由による。

●愚直とも言えるほどにまつすぐに生きた人物ということになる。父と住み始めて一〇年、寝たきりになって三年が過ぎたある日、父が突然こう言つて、手を合させた。自分がこんなに大事にされるのは、氏神があわれに思い、なんじにのりうつたにちがいない。ありがたうことだ。父は貞享三(一六八六)年の春に亡くなつた。

●父親が酒好きであったが、苦労している正助に、とある酒屋が酒をただで渡すも、彼はその日からその酒屋に行かなくなつた。「あくまで自分の働いた金で買って飲ませたい」という理由による。

●愚直とも言えるほどにまつすぐに生きた人物ということになる。父と住み始めて一〇年、寝たきりになって三年が過ぎたある日、父が突然こう言つて、手を合させた。自分がこんなに大事にされるのは、氏神があわれに思い、なんじにのりうつたにちがいない。ありがたうことだ。父は貞享三(一六八六)年の春に亡くなつた。

●父親が酒好きであったが、苦労している正助に、とある酒屋が酒をただで渡すも、彼はその日からその酒屋に行かなくなつた。「あくまで自分の働いた金で買って飲ませたい」という理由による。

●愚直とも言えるほどにまつすぐに生きた人物ということになる。父と住み始めて一〇年、寝たきりになって三年が過ぎたある日、父が突然こう言つて、手を合させた。自分がこんなに大事にされるのは、氏神があわれに思い、なんじにのりうつたにちがいない。ありがたうことだ。父は貞享三(一六八六)年の春に亡くなつた。

りましようか。全国区で知名度があるとも言える正助さんは、現代の地域おこしにも貢献していて、宗像市武丸には正助ふるさと村が開設され、正助資料館に正助廟、父親を背負つた正助の銅像、正助みそなどの地元産品、正助のイメージキャラクターもあります。

正助の孝行は幕府にも知られ、その伝記は「孝義録」に収録されました。「孝義録」は道徳的にすぐれた行いのあつた人物を調査したもので、全国から八五七九人が記録されているということです。一部の人物については漢学者が伝記をまとめて

大正一三(一九二四)年に建てられた記念碑が地島小学校の前にある。

『福岡県史資料』から筑前国糟屋郡の住人を抜粋すると次の通りです。この中には、現在の須恵町に相当する村の名は挙がっていません。

※年次は表彰された年。目次を拾い、( )は本文から補いました。

「孝義録」  
奇特者 上中原 庄屋 助次郎 二十四歳 延宝三年(一六七五)  
奇特者 尾仲村 百姓 九郎 左衛門(八十一歳)元禄十一年(一六八九)  
平素から質素に暮らし、貧しい人を助け、飢饉には粉・銀・米を施し、川を渡れないような所は飛び石をすえ、板をかけて橋とした。  
孝行者 若杉村 百姓 甚五 年齢不明 明和四年(一七六七)  
老いた母に孝行を尽くした。  
「筑前国孝子良民伝」  
尾仲村 九郎左衛門(前同)  
中原村 助次郎(前同)  
延宝二年と翌三年、国中が凶

います。

『福岡県史資料 続第一輯(伝記編一)』(昭和十六年三月)は福岡県域(旧筑前・筑後・豊前)の民衆で、親孝行などの善行を理由に表彰された人たちの伝記を掲載しています。これらも「孝義録」と同じく漢学者が伝記を書いたもので、選ばれた人たちはといえ、無名の民衆の姿や日常の生活を藩校の偉い先生たちが記録したところに面白さがあります。同情すべきかわいそうな境遇に置かれた人たちが、そうした境遇にも負けず、道徳的に讃えられる生涯を送つたという筋立てになつていることが多いようです。宗像郡地島の「こや」という女性性は記念碑が建てられました。私がかつて発表したことのある文章を引いておきます(『リベラシオン』二三四号、二〇〇九年六月)。

作に襲われた。同三年、藩主は米三十五俵をこの村の救援米とした。上中原の庄屋助次郎はその分配の際、上中下の三等に分け、(上)三十五人は米を取らず、(中)四十人は定められた量を受け取り、最も困窮した(下)の六人は(上)の分をも合わせて受け取つた。これによつて破産する農民は出なかつた。藩は(上)の三十五人にはあらためて各一俵を支給し、助次郎も表彰された。

「筑前国孝子良民伝続編」  
若杉村 甚五母子(前同)  
甚五の母は後妻だったが、先妻の子(甚五の兄)を大事に育てたことで「義」、甚五は母に尽くして「至孝」を表彰された。

「筑紫遺愛集」  
(表粕屋郡)  
孝心者  
戸原村 鶴松・上山田村 与作・久原村 善次・尾中村 半次／千次・内橋村 藤右衛門 娘いよ・篠栗村 利平妻・篠栗村 利七・箱崎浦 義平・箱崎村 善右衛門・松崎村 平助・田中村 林平・久原村 仁作・久原村 円次・志面(志免)村 藤作娘みつ・篠栗村 次六・箱崎村 半次・大隈村

宗像郡地島に一人暮らしのこやという女性がいた。こやは不幸な境遇を送つたが、どんな運命にも明るく立ち向かうたくましさを持つていた。

父九郎右衛門は極貧で、九歳のこやは米(玄米)一俵で身売りして奉公に出た(口減らしの意味もあつたのだろう)。大人になつても、機会があれば落ち着き先(婚家先?)を紹介するなどと主人が言うので、それを信じて働き続けている内に、いつしか一七年(数え年の計算)が立ち二五歳になつた。

こやは思った。いつまでもこのまま働き続けるべきだろうか。早く家にもどつて、年若い父を助けたいものだ。思い切つて主人に暇乞いをした。主人はこれまで育ててきたのだから、と一五俵の身の代米を請求

善助娘きち・名古屋子(村甚吾・箱崎村 藤右衛門・久原村利作・松崎村利右衛門娘なつ・高田村 平作・箱崎村 伝右衛門・乙大村 庄屋勘吉 奇特者  
和田村 藤市・篠栗村 郡島 和内・同村 茂吉・若杉村 九平・萩尾村 左助・酒殿村 小七／同妻・神宮(新宮) 浦 弥山弥右衛門※新宮は裏粕屋郡・久原村 吉次

勤功者  
尾中村 諸用聞辰次  
長寿者  
箱崎村 長助  
(裏粕屋郡)  
孝心者  
川原村 佐助娘すき  
荇内村 藤右衛門  
貞節者  
下府村 太平妻

傍線を引いた戸原村(現粕屋町)の鶴松はとても感心な少年で、幼少でありながら表彰を受けました。粕屋町には詳しい記録も残されています。次回は、鶴松を取り上げます。